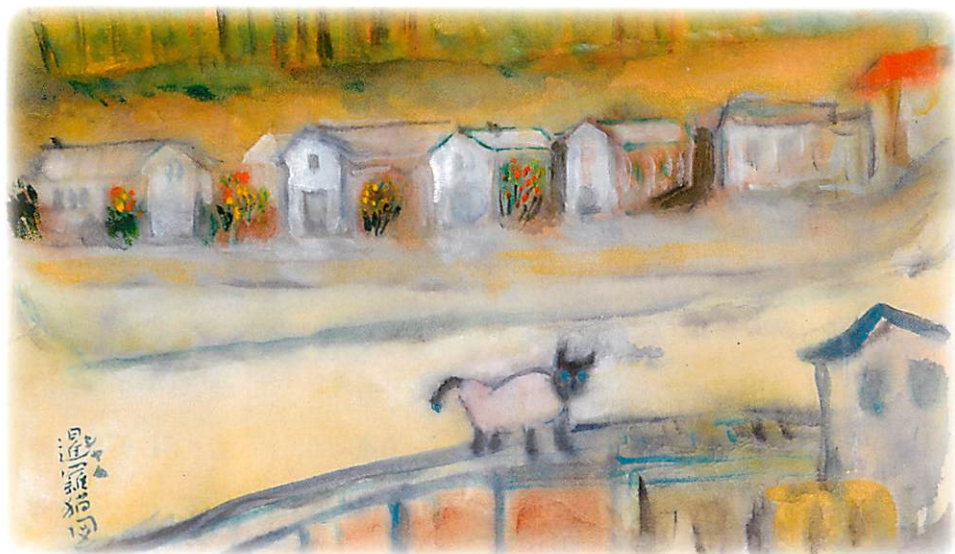


甲田の裾

KŌDA NO SUSO



「三内伽羅松の画譜」より「暹羅猫図」工藤正廣 画

2017

2・3号

通巻693号

松丘保養園の機関誌

入所者へのケアの向上のために

…………… 松丘保養園 園長 川西 健 登 ……	1
新任の挨拶 …………… 事務長 大間 透 ……	4
ごあいさつ …………… 薬剤科長 大塚 誠二 ……	7
新任のご挨拶 …………… 事務長補佐 岩 渕 明 浩 ……	8
「歴史に学ぶあの年、あの頃」-前編- …………… 小 林 慧 子 ……	9
再掲 随想 「天虎組の仲間たち」 …………… 滝 田 十 和 男 ……	17
小さな集まりを立ち上げて …………… 好善社社員 藤 井 征 子 ……	24
創作のよろこび …………… 木 村 龍 一 ……	26
新刊紹介 語り継がれた偏見と差別 福西征子著 ……………	30
第5回 思い出食堂 …………… 治療棟看護師 須 藤 真 央 子 ……	32
春の思い出食堂 …………… 看護助手 横 濱 明 美 ……	35
新人紹介 ……………	39
人事異動 ……………	43
自治会日誌 ……………	45

表 紙：工藤正廣 画「三内伽羅松ノ画譜」より「暹羅猫図」
※ロシア文学者で詩人の工藤正廣氏の描いた松丘保養園の絵巻の
中から季節の風景を紹介させていただいております。

写真提供：福祉室

入所者へのケアの向上のために

松丘保養園 園長 川 西 健 登

松丘保養園では三年ほど前からケアの質の向上のためにグループ回想法、ユマニチュード、認知症高齢者への環境支援のための指針（PEP）等の方法を取り入れた試みが始められ、既に従来見られなかった成果が得られてきています。成果とは、とりもなおさず入所者のみなさんの状態が見違えるほどよくなってきたという事です。松丘保養園の新しいケアが着実に芽生えているのです。

ユマニチュードはスタッフが入所者と真正面から向き合い、視線を合わせることで、心からことばをかけること、話すこと、両手で包み込むように触れること、起立歩行を促すことを基本的な柱とするケアの技術です。言われてみればあたりまえのことのようですが、日常の介護、看護、診療の状況を顧みると、ユマニ

チュードの実践は必ずしも容易なものではなく、繰り返し学び体得すべき重要な技術であるということが実感されます。グループ回想法は感情の表出を促し、会話の楽しみを共有し、参加者を活性化し絆の形成を図る目的で野村豊子先生のご指導で実施されました。回想法はスタッフが入所者の固定的な記憶を引き出すというのではなく、入所者が思い起こし記憶が語り出される回想という創造的な行為にスタッフもいっしょに立ち会うことです。直訳的には専門的環境支援指針とされるPEPは入所者の諸機能が最大限に発揮できるように多面的に環境を整える方法です。入所者に影響を与える最大の環境はスタッフ自身ですから、自らが入所者の五感にとつてどのような感覚入力刺激になっているかを振り返り吟味することも含まれます。これらの三つの方法に共通している基本的なスタンスは、スタッ

フが入所者と対等のひとりの人として、ハンセン病後遺症に加えて加齢に伴う様々な機能低下のある入所者が残された機能を最大限に發揮して快感のうち自己実現するその時と場に介助者として意識的に共に在るということですが、これがよいケアの前提です。

このような方法を取り入れたスタッフのケアによって入所者の状態がどれほどよくなっているかということ、たとえばよく怒ったり興奮して大声を上げたりしていた入所者が今はスタッフに両脇を支えられていっしょに三百六十五歩のマーチを歌いながら歩いていきます。心の赴くままに園内を散歩する視覚障害のある入所者の散歩にはスタッフがその方が気のすむまで話を聞きながら一緒に歩いていきます。それはスタッフが入所者の歩きたいという意思を第一として尊重したケアの実践です。

配偶者の死後、だんだんほかの入所者との付き合いが減って孤立しスタッフのケアも拒みがちだった入所者がケアを受け入れるようになり、人形を自分の家族として可愛がっています。センターの中での人間関係

が豊かになり、その変化が周りの入所者に広がっています。入所者のために自分の家から人形を持つてくるスタッフはいつも入所者のことを考えておられるのです。

カーテンの掛かった部屋で独りテレビを眺めていた物忘れの著しい入所者に対して、スタッフが居室の明るさや家具の配置を変え、思い出のある写真や手紙を壁に掲示するなど見当識を支援し回想を促すよう環境を調整しました。それによって入所者自から手紙の返事を書き、昔よくした編み物をスタッフに教えるようになつていきます。認知機能の低下した入所者の記憶を呼び覚まし、何かしたいという動機付けになるように居室環境を豊かに整えることの重要性を教えられます。

生け花の経験のある入所者からスタッフが定期的に生け花を習っています。スタッフに教えるという役割を持つたその入所者は生き生きと明るくなり、娯楽室に置かれた生け花をおして入所者間の関係が回復しています。グループ回想法から生まれた思い出食堂は

入所者が昔作ったいろいろな料理をスタッフが教えてもらいながらいっしょに作りみんなでいただくというコンセプトで開かれ、毎回好評で二年足らずでもう九回目を迎えます。いずれもスタッフが入所者から教えていただくという形のケアです。入所者を単なるケアの受け手に止めない、入所者が主体的に参加するケアへの転換によって、よりよいケアが生み出されています。

里帰りに行かれる入所者も増えています。スタッフといっしょに計画して何十年振りに遠距離のご実家の墓参に初めての新幹線に乗って行かれます。帰園後みなさん一様に生き生きとしてまた行きたいとおっしゃいます。入所者のみなさんご自身が動き出したという感じですよ。

入所者のセンター間の相互訪問や病棟へのお見舞いも増えてきています。特に最期近い患者さんの場合はできるだけ多くの入所者にお知らせして会っていただくように努めています。驚いたことに寮友のみなさんが声をかけると、それまで反応がなかった患者さんに

表情がでて頷いたり返事をしたりするのです。狭義の治療より「けやぐ」のひと声の方が生きる力になるということをスタッフは驚きをもって実感しています。

さらに、長年いっしょにしながら自分たちは入所者のことを意外に知らないということにスタッフは気づき始めています。入所者のことを知らないでよいケアはできません。入所者ひとりひとりの個人史に基づく生活の場でのケアのために、スタッフが入所者から過去の保養園での生活について聞かせていただくプロジェクトが今年度から始まっています。これは入所者の生活史を教えていただくことを通して保養園の歴史を学ぶことに繋がっていきます。

松丘保養園のスタッフが協力して入所者といっしょになつてこのような新しいケアの形を造り出しているのはすばらしいことです。この中心的な働きをしているのは入所者のケアに直接関わっている介護員と看護師です。このような介護員と看護師の協働関係がますます促進され、これに他職種が加わったチームケアがさらに大きな流れになつていくよう期待しています。



新任の挨拶

事務長 大間 透

この度、四月一日付で国立病院機構函館病院より国立療養所松丘保養園に異動してまいりました大間 透と申します。どうぞよろしく御願ひ致します。

出身は、北海道札幌市です。小さい頃は、車に混ざって荷馬車がとおり、小学校に登校の際に馬車の後ろに隠れてぶら下がり登校したこともありましたが、札幌オリンピックを機に地下鉄が走るなど近代化と札幌一局集中が加速し、道民五〇〇万人の内の四割の約二〇〇万人が集まる都市となっています。平成十六年四月に東京の施設に単身赴任となってから十四年目を迎え、札幌以外のところで長く暮らしていますので、家族の元に帰省した際にはナビが無いと道に迷ってしまうほど日々札幌は変わり続けています。

さて、これまでに私が勤務した施設は、昭和五十七年に国立札幌病院（現北海道ガンセンター）に採用されてから、国立療養所西札幌病院（現北海道医療センター）、国立療養所美幌病院、国立十勝療養所、国立がんセンター中央病院、国立病院機構函館病院、国立病院機構弘前病院と七施設です。松丘保養園は八施設目になります。青森県は二年前に弘前病院に二年間勤務して以来の二度目です。一施設当たりの勤務期間が長く他の人に比べると経験した施設数は少ない方です。

趣味はジョギングと音楽を続けています。ジョギングは、高校時代に中距離走の一五〇〇mを専門に走っていました。就職した頃の先輩から市民マラソンに誘われ、以来三〇年以上週末にジョギングをするようになりました。一頃は大会にも頻繁に参加し、北海道マラソンも完走したことがあります。今は大会に参加することは無く、腰痛予防のために続けています。療養所の周りは起伏が激しく、ジョギングコースとしては宿舎に戻るところは上り坂で結構タフなコースで鍛えられそうです。普段の移動も、車は家族にとられ、オールシーズン自転車移動しています。一方、音楽の方は、歌うのは下手なので、聞くのと演奏専門です。聞くジャンルは、和洋何でも好きです。ここ一〇年くらいは、単身生活で空いた時間を利用してチェロを弾くようになり、所属のオーケストラで演奏曲目が決まるとその曲を聴きまくるので、今はクラシックを聴く機会が多くなつてしまいました。チェロは、最初に半年間、先生に見てもらっていましたが、その後の転勤先で先生が見つからず、今は独学のメチャクチャで、オーケストラに入つて勉強していつています。この度青森に来たので、以前所属していた弘前交響楽団にまた参加しようと思つていますし、青森市内にも青森交響楽団というアマチュアオーケストラがありますので参加出来ればと思つています。

ハンセン療養所については、今まで関わったことが無く、国立療養所松丘保養園も国立病院機構弘前病院に勤務していた二年間で数回、新青森駅にお客さんを迎えに行くときに横を通つた程度です。引継ぎに来たときに、甲田の裾・成瀬豊画文集・秘境を開く・中條資俊伝を渡され、勉強中です。また、国の会計制度に戻るのには平成十七年以来です。国立病院機構では健全経営が問われ、近年は国立病院機構全体としても資金余力が厳しく、なお一層経営改善が叫ばれていて、収益は一円でも多く、支出は一円でも削減することを求められていました。国の機関といえども同様の改善は必要だと思つています。赴任して三週間が過ぎました。今までの施

設とは異なり来訪者・行事が多い事、福祉室という特殊な組織があること、事務の組織としても戸惑うことばかりです。ただ、入所者の思いに応えた園の運営をしていくためには、事務の組織の見える化をして、横の連携が出来ていかなければ、円滑な対応が出来ないと思っております。

「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が施行され、最高裁の不適切な対応判決が出され、人権・保障問題は進んで行くようになってきていると聞いていますが、入所者の超高齢化を考えると早急に対応していかなければならないことばかりだと思えます。

最後に、当園の理念「私達は、入所者一人ひとりが歩んだ道のりと生命の尊さを深く認識し、地域の人々と共に歩む、豊かで心安らかな療養環境の提供に努めます。」を常にここに抱いて、地域に開かれた松丘保養園として、適切な管理運営により、入所者の皆様の安全・サービス向上に対し、微力ながら笑顔で勤めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。



ごあいさつ

薬剤科長 大塚 誠 二

この度、四月の異動に伴い国立療養所松丘保養園に薬剤科長として参りました、大塚誠二と申します。よろしくお願いいたします。

私は大学から東北（宮城県）在住となり、卒業後福島県、宮城県、岩手県、秋田県と転勤して参りましたが、青森県勤務は初めてとなります。ハンセンの施設で働くこと、薬剤科長として働くこと、青森県に住むこと等々初めてのことが多くまだ戸惑っているところですが、これから色々少しずつ覚えていこうと思しますのでよろしくお願いいたします。

私は釜石病院（岩手県）に勤務した頃、釣りを覚え魚が好きになり料理もその頃覚ええました。青森といえやはり魚介のイメージが強く大変楽しみにしております。

短い文章で恐縮ですが、薬剤師として松丘保養園のために少しでも貢献出来ればと考えております。



新任のご挨拶

事務長補佐 岩 渕 明 浩

この度、四月一日付人事異動に伴い当国立療養所松丘保養園の事務長補佐に昇任となりました岩渕明浩と申します。

生まれは、岩手県最南端の一関市です。狛鼻溪や敵美溪などの名勝地があり、世界遺産登録のまち「平泉」や三陸方面への観光拠点にもなっております。実家は現在も一関にありますが、転勤が続く中、子どもたちも中学・高校と成長し、転校を強いることも難しくなったため、前住地の八戸で住居を構え、今回は新幹線にて通勤することになりました。

高校卒業まで一関で過ごし、昭和五七年に国立郡山病院に採用になり、その後、国立療養所福島病院、国立療養所宮城病院、国立療養所西多賀病院、国立療養所道川病院、国立療養所岩手病院、国立病院機構釜石病院、国立病院機構八戸病院に勤務し、当園で九箇所目の施設となります。十年以上国立病院機構病院の仕事をして参りましたので、国の制度を再度勉強しながら努めて参りたいと思っております。

着任して驚いたことは、敷地の広さと様々な建物があることでした。今回初めてハンセン病療養所での勤務となり分からないことばかりですが、皆様にご迷惑をおかけすることのないよう、当院の基本理念「私達は、入所者一人ひとりが歩んだ道のりと生命の尊さを深く認識し、地域の人々と共に歩む、豊かで心安らかな療養環境の提供に努めます。」を常に念頭に置き、微力ではございますが精一杯頑張つて参りますのでよろしくお願いいたします。

「歴史に学ぶあの年、あの頃」——前編——

——一九三六（昭和十一）年を中心として——

小林 慧子

一九三六（昭和十一）年十月二十二日、北部保養院（現・松丘保養園）は、二度目の大火にみまわれた。当時の地元紙『東奥日報』の貴重なスクラップを以前、菊池正實氏から頂いた。現在この大火を経験された方も少なくなり、記憶の片隅からも忘れ去られようとしている。過去の悲惨な災害の歴史を残された新聞報道、機関誌『甲田の裾』等、関係資料をもとに、当時の世相、ハンセン病政策の動向、北部保養院の内実、当事者の思い、早期復興を成し遂げた背景等、その歴史から何を学ぶことが出来るかを考察してみたい。

（一）一九三六年前後の世相と、ハンセン病政策

一九三四（昭和九）年秋、東北地方は冷害・大凶作で欠食児童や娘の身売りが続出し、社会問題になっていた。青森県農政課の調査によると、一九三三（昭和八）年一

月から昭和九年十月の間に、県内で売られた者の数は、二、九七五人で業種別にみると女中、酌婦、芸妓、女工、娼妓等となっている。この年、県下一六七市町村のうち娼妓に売られた者のない市町村は、僅か二〇に過ぎなかった。芸妓に売られた者は、累計七、〇八三人に達したが、娼妓に売られた者は昭和六年の約三倍に達したと言われる。又青森県下の欠食児童数は、一九三四年九月現在、五、八八三人を数えた。秋田県では欠食児童のために、イナゴ、ドングリなどの調理研究を実施した。昭和六年以降の青森県は、成年男子が中国東北部（満州）で銃を取って戦い、銃後は不況と不作に命をすり減らす苦勞を重ねていたのであった。

一九三六（昭和十一）年二月二十六日には、皇道派青年将校によるクーデター二・二六事件が起き、東京市に戒厳令がしかれ、二十九日に鎮圧されたが、反乱軍の幹

部十七名が処刑され各界に衝撃を与えた。政局は一九三一年九月の満州事変から一九三七（昭和十二）年七月七日支那事変へと進み、一九三八年「国家総動員法」の成立、「挙国一致」で戦時体制がとられていった。一九三〇年から四〇年代前半の政治史は、「軍部支配」の形成・確立・崩壊の過程としてとらえられる。

ハンセン病患者調査は、一九〇四（明治三十七）年から行われ、三十七年は三〇、三五七人であったが、一九三五（昭和十年）癩患者調査数では一五、三七一人で漸減傾向を辿っている。

一九三五（昭和十）年「癩患者根絶策」として「二十年根絶計画」が採用された。二十一年間で日本からハンセン病患者を根絶するとし、十年間に一万床の増床に着手した。一九三六（昭和十一年）年三月末現在の收容数は五、八〇八人であった。この頃より無癩県運動が全国的に活発化した。一九三六年八月には長島愛生園で待遇改善と自治制度の確立を求め「長島事件」が起きた。

日本軍の海外進出により東アジアにおける日本の占領地が拡大した結果、ハンセン病政策もこれらの領地にも及び、公立では朝鮮一九一六（大正五）年二月小鹿島慈恵医院を、台湾では一九三〇（昭和五）年十二月台湾染

生院を、満州国に於いては同康院をそれぞれ開設した。また日本の委任統治下に置かれた南洋諸島でも小規模な療養所として、一九二八（昭和三）年ヤルート島、一九二九（昭和四）年にサイパン島、一九三〇（昭和五）年ヤップ島、一九三一（昭和六）年パラオ島にも開設され、これらは敗戦まで続いた。

北部保養院では、一九三六（昭和十一年）年六月二十五日皇太后陛下のご慈悲を偲び患者親睦会による「敬仰坤徳」碑を公園内に建立、同月三十日には保育所内に公立新城尋常高等小学校二葉教室が設置され、未感染児の義務教育が開始された年であった。

（二）ハンセン病に関する啓蒙

一九三六（昭和十一年）年九月二〇日「癩問題に就いて」のパンフレットが、三井報恩会より発行されている。緒言には次のように書かれている。当時のハンセン病に対する一般的な認識であったのだろうか。

緒言

「世に病苦と謂わるゝ中で、癩ほど深刻悲惨な病気はあ
るまい。一度この病に犯さるゝや、畜（ただ）に本人の

みならず血族縁者ひとしく暗い憂いに沈まねばならぬ。癩には遺伝、不治、天刑といふ古来の因襲が付き纏ふて世間から極端に忌み嫌われるのである。然し輓近(ばんきん)医学上、癩は遺伝に非ずして病菌に依る伝染病であるといふことに、反対説を称ふる者はいないやうになり、また早期に適切な治療を加うれば病勢を阻止し得ることも明らかになつてゐる。

欧米諸国でも本病は相当に広がつてゐたが、各国民の絶えざる努力に依り、今ではその一部を除き殆ど本病の姿が見えないまでに駆逐された。實際癩の根絶は、医学の発達せる現代に於て決して不可能な問題ではない。要は国民の決意と努力の如何に懸かるのである。

従来からの遺伝は否定されたとは言え、当時は未だ遺伝を信じている人は社会の各階層を通じ少なくない。「癩の根絶には、患者を隔離收容により伝染を阻止することにある」と。

(三) 官公立療養所長會議

一九三六(昭和十一)年十月一、二日内務省會議室に於いて官公立療養所長會議が開催された。出席者は、長

島愛生園長 光田健輔、栗生樂泉園 古見嘉一、星塚敬愛園 林文雄等をはじめとした各施設メンバーと共に、台湾樂生院長、朝鮮小鹿島更生院長、南洋サイパン医院長、司法省刑事局等も出席されている。北部保養院(現・松丘保養園)からは、院長 中條資俊、主事 富田潔、青森県衛生課長 味岡荘ら三名が出席された。

各施設からの主な提出議題を見ると、内務省は、

- 一、癩根絶計画二関スル件
 - 二、在宅患者ノ調査及指導二関スル件
 - 三、特殊国立療養所施設設置二関スル件
- 全生病院は、第一に不良患者特別療養所設置二関スル件 等があげられ、出席者のかっこ書きで(監禁所)のメモがある。

星塚敬愛園は、不良患者收容所及癩刑務所設置二関スル件。

北部保養院は、イ、東北二国立癩療養所二関スル件
ロ、癩根絶促進二関スル件 ハ、患者待遇改善統一二関スル件
が出され、更に癩予防協会二関スル希望として、
イ、癩予防協会経営ノ癩相談事業拡張二関スル件 が提出された。この會議の中心議題は、内務省並びに全生病院から提出された「不良患者特別療養所設置二関スル

件」であつたのだろう。一昨年二〇一五年群馬県草津栗生楽泉園に再現された、当時「特別病室」として設置された「ハンセン病重監房」並びに「癩刑務所設置」について、この会議で検討されている。

北部保養院 中條院長は、「東北に国立療養所を」との議題が提出された。会議に先立つ一九三六年五月号『甲田の裾』に中條は、第二地区である「東北地方に国立療養所の設置を要望す」する旨の所感を述べている。

「其の地方に於ける患者の收容に便せん為に外ならぬと信ずる。此の見地からせば、国立療養所の無い地方は、(中略)差別を以て遇せられるゝに当たるのである。又患者輸送難は、積雪地方に於て痛感する一事であり、距離の遠近も輸送の難易に關係あるは言ふ迄もない。(中略) 近来療養所に送らるゝ患者は、家庭の者を大部分として居る。之れは療養所開所当時、浮浪患者が主として送られたとは頓と趣を異にして居る。従つて踪跡を晦(くら)ます為、遠方の療養所に收容を望むような患者は著しく減少した。之れ或は『癩は遺伝にあらず伝染なり』と言ふ宣伝の効果とも思はれるが、兎に角患者の大多数は近き療養所に入つて、時折りは親、兄弟、妻子等

にも面会したいと希っている状況から見ても、他区にある然も遠き国立療養所に輸送する代わりに第二区にも均霑せる收容施設を欲する次第である。——全国各療養所共に超満員を告ぐる際、患者自ら訪院收容を乞ふもの相繼ぐ現状であるが、弾力性に乏しい經常費予算を以ては、定員外に救う力洵に微弱で、情に於いて忍び難きも門前払いの止むなき場合も屢々で、殊に雪季に於ける此の場合は一層の悲惨事である。

療養所の設置に當つて莫大の費を投じ豪壯華麗にして狭きよりは、平凡にして広きを尊び風雨を凌ぎ積雪に耐へ、住み心地好き所相を選むを可なりと想ふ。要は経済を忘れずに、收容力の均霑普及を望み、薄幸なる北地に平凡ながらの国立療養所設置を要望する。」

(後略)

この要望は「患者自ら訪院收容を乞ふもの相繼ぐ現状である」という悲惨な状況に置かれた在宅病者救済の為、各界に訴え二年後の一九三八年四月、国立療養所東北新生園創設に結び付いた。この陰には、三井報恩会理事長米山梅吉の大きな働きがあり、敷地となる土地一〇万坪近くを購入寄付されたものであつた。

(四) 『東奥日報』による大火報道及び関連記事

官公立療養所長会議の二〇日後、十月二十二日北部保
養院（現・松丘保養園）は、二度目の大火に見舞われ、
地元紙は号外を出し、翌朝十月二十三日のトップニュー
スで詳細に報道した。その内容を再録する。

・号外発行―北部保養院火事速報のため今晩、弘前、
八戸両市はじめ本社各支局所在地に於いて号外を発行し、
本誌に添付配布した。」

・今晩二時間に亘り北部保養院全焼

損害六十五萬圓 発火原因に不審？

二十二日午前零時五十分東郡北部保養院礼拝堂付近か
ら（事務所東方）から出火し、折柄西北の烈風に煽られ
みるみるひろがり患者室を襲ひ、人々が大事を知つたと
きは手の施しやうなく、新城、青森その他から消防出動
したが山中にある建物なので水利の便が悪く手をつかね
て見ているより外なく燃え続けること約二時間、午前二
時半頃に至つて漸く鎮火した。

発火場所は礼拝堂付近であるが、平素火の気のないと
ころであり、不審火とされて居り、原因は目下嚴重に取
り調べ中である。現在同院には五百八十名の患者が収容
されているが、風と雨に飛散する火の粉の中を患者が助

け合ひつゝ逃げ惑ひ、僅かに木の下などに避難し、或は
道端に座つたまま濡れてうなつてゐるものもあり、実に
悲惨な状態であつた。幸いに死者はない模様で、患者は
保養院の保育場及職員官舎に応急的に一時収容した。焼
け残つたものは物置と官舎だけで、広大な同院は全く焼
野原と化し器具機械及び書類等は相当搬出してゐる。
二十二日午前十時県消防課の調査の結果損害は建物
三十五萬圓、器具機械其の他三十萬圓、合計六十五萬圓
と見られて居る。同院は火災保険四十五萬圓余を附して
ゐる。火焰尚物凄い午前二時頃中條院長を訪へばびしょ
濡れになりながら語る。

「十二時頃就寝したんだが火事だとの声に飛び出したと
きはもう全院に火が廻り全く手の付やうがなかつた。今
は只申し訳ない心で一ぱいである」

逃げ惑う患者達、悲惨！火と雨に追はる

北部保養院出火の報と共に青森署では直ちに全署員の
非常招集を行ひ太田署長を総指揮官として、署員を集り
次第トラックに乗せて現場へ輸送した、第一隊が到着し
たときは、水利の便なく、新城消防組員の手で破壊消防
を行ふのみで警察隊は直ちに患者の救助収容及び荷物の

搬出に努力し患者を同院北側の山の上及び同院保育場に避難せしめた。患者は火と折からの雨に右往左往してなすことを知らず軽患者は重患者の手を引き荷を担ぎ道路や野原にはわんわん泣いてゐるものが無数にいて全く悲惨の極みであつた、一方小田川次席が指揮して教習所生徒を動員トラックで現場に急行、火事場の警戒、患者の收容等につとめた。尚新城、青森間の国道は工事中のため自動車の運航出来ず、消防及び警務隊は、青森から油川を経由して大迂回してゐるために非常な不便を感じてゐる。

今回は二度目の大火・以前も礼拝堂から出火

今晚全焼した北部保養院は昭和三年七月三十一日午後七時、同院西南隅のキリスト教礼拝堂から出火、旧建物をほとんど全焼し、損害は約十八万円であつたが、原因は結局不明のまゝにすぎ居り、今回は二度目の大火である。

患者は各所に收容行方不明は一名

北部保養院には現在五百八十名の患者が收容されて居り、午前三時現在で二名の行方不明者を見てゐるが、左

の如く応急処置を講じた。即ち院内保育場に二百名、職員官舎三棟に百五十人を收容し更にバラックを急造すべく手配中である。尚池田警察部長を始め警察部各課長も現場に詰め、関係道県の緊急衛生課長会議を二十二日中に招集して善後策を講ずる筈である。また火災発生と共に県病より副島博士引率、赤十字支部より奈良主事引率の救護班及青森市医師会の救護班総出で患者の措置に当たつてゐる。

△

北部保養院の火事で行方不明となつた患者二名の中一名は二十二日午前四時頃青森市沖館川口そばや付近において発見取り押へたが残りの一名は尚所在不明で県下各署に手配捜査中である。

保険は四十五萬圓

北部保養院の保険金額は四十五万六千四百九十五円であるが、その内焼失したものは三十四万一千三百三円焼失せざるものは五万五千三百九十二円にのぼつてゐる。然して建物の損害はその保険金額をもつて充当し得るが、その他の医療器具機械什器等の損害は目下取調中である。

助けて呉れつと患者しがみつく 成田保安課次席談

北部保養院火事と聞いて真先に駆けつけ患者の避難並びに荷物搬出を指揮した県保安課次席成田萬三警部補は二十二日午前二時頃炎々と燃ゆる事務室前でびしょ濡れになりながら左の通り語った。

僕が駆けつけた時はまだこの事務室は無事でした、十数名の患者が右往左往していたが僕を見ると一時に助けてくれとしがみついて来たのには些か驚きました。その中だんだん火は廻つては来るし患者達を指揮して事務室内の模型其他のものを全部運び出させました。それから患者を避難させた譯ですが水利の便が全く悪く破壊消防のみで、焼け落ちていくのを只あれあれと見てゐる外無かつたのは残念でした。

赤支、県病の救護班活動

北部保養院の火事の報と共に県病より副島博士以下医師十名並びに看護婦十名が現場に急行救援に当たつてゐる、尚高辻学務部長外、赤十字支部では二十二日午前九時頃奈良主事以下北山夫人等が焚出し三百人分その他をトラックに積んで救援に赴いた。

山田本社長見舞

今晩の北部保養院大火に際し山田本社長は本日午前同院を訪問、中條院長に見舞いをなすと共に罹災患者に対し御見舞金を贈呈した。

飛火で掘立小屋焼く

別項北部保養院の火災中新城村大字石江、農 田中富吉(六十二) 所有の馬鈴薯貯蔵掘立小屋も発火し遂に之を全焼した。原因は北部保養院からの飛火で損害百二十五円。

〈地元紙報道から見えるもの〉

十月二十二日の大惨事をトップ記事で詳細に報道している。火事が起きたのは、深夜零時五十分の真夜中の出来事、風と雨が降りしきり火の粉が舞う大混乱の最中、患者同士の助け合い、職員、消防、警察関係者の迅速な働き、必死の救助活動により、五八〇名の入所者が一人の犠牲者もなく終つたことは不幸中の幸いで、その惨状をつぶさに伝えている。

当時日常的には、患者に対応するときには感染防止の為に完全防備のいでたちで接していたが、この火災現場で

は、皆が人命救助を第一に必死で患者救出に当たっている。火事で行方不明となった患者二名については「沖館川口そばや付近において発見取り押へたが、残りの一名は尚所在不明で県下各署に手配捜査中である。」と報道されている。当時のハンセン病者に対応する部署が警察行政で、まさに犯罪者への対応と同一の状況が垣間見える。だが火災発生と同時に地元県病、医師会等の医療者の救護活動を始め、赤十字の炊き出し等、一回の欠食もなく、関係機関が迅速に支援の手が差し伸べられている。消火活動は「水利の便が全く悪く破壊消防のみで、焼け落ちていくのを只あれあれと見ている外なかったのは残念でした。」と、患者避難並びに荷物搬出を指揮した担当官は語っている。

昭和十三年入所した菊地正實は、北部保養院の周囲の状況について、

「保養院の周囲に家は一軒もなく、沼の向かい是一本の木もない裸の山で八甲田山もよく見えた。国道からの入り口に今も商店の脇にへばりつくように立っている保養院を表す標柱だけが、裸電球に照らされてぼつんと覆われて立っていたのが目に残る。」と述べている。

当時の建物は現在では想像も出来ない人里離れた寂しい場所であった。また防火設備等の不備がうかがわれる。「原因は目下嚴重に取り調べ中である。」入所者は保育場、職員官舎等に無事誘導避難された。着の身着のままずぶぬれになりながらの避難、寒さに震えながらのどれほどの恐怖感があっただろうか。翌朝の報道では、被害額、保険加入額などの詳細な情報が記され、地元での北部保養院の位置づけの大きさを知らることが出来る。

〈参考文献〉

- 『秘境を開く』—そこに生きて七十年—
昭和54年10月2日発行 発行者 青森県救らい協会
- 『中條資俊伝』編者 中條資俊伝刊行会
昭和58年11月2日発行 発行者 青森県救らい協会
- 『青森市の歴史』青森市史編さん委員会
発行 青森市 1991年10月1日四版
- 編集復刻版『近現代ハンセン病問題資料集成 戦前編』第五巻
1936〜1937 不二出版 2002年12月10日発行
- 『日本近現代史研究辞典』鳥海 靖・松尾正人・小風秀雄編
東京堂出版 1999年8月5日初版発行
- 『現代史年表』神田文人・小川英夫 編
小学館 2009年3月30日発行

再 掲
随 想

「天虎組の仲間たち」

滝 田 十和男

私が自分の病氣をおし隠して、或る製鉄所の工員として働いたのは、昭和十七年の秋から翌十八年の春にかけてであった。

その極く短い期間こそ、私の生涯のうちで自分のありったけの力を、仕事に打ちつけて働くことの出来た、最も健康な時代だったとも云える。

世は挙げて戦争目的のために駆り立てられ、そのうちでも重要な軍需産業として鉄を造る工場での明け暮れは、ほぐれることのない緊張の連続だったが、まだ二十歳前の若い私の肉体は、それにも耐えて平然としていたのだから、病醜の傾く儘に任せてしまった今の私からすれば、何と誇りある時期だった事だろう。

厳寒のまだ暗い朝の四時頃から起きて、毎日出勤し続けた元気さなど、今の私には到底求め得べくもない苦行だったが、それだけに十数年経った今でも、郷愁

みたいに私を駆り立てて思い出させる数々の事があつた。

そのうちで一番楽しい記憶として残っているのが、天虎組のことだ。

私の属する職場であつたガス管理班には、二十五、六人の工員達が居たが、その半数近くがまだ二十歳前後の若者達であつた。

工場の主要部とみられる施設には、殆ど送かんしているガスを管理する職場だけに、勤務中は同僚達が何時も走り廻っていて、全員が顔を揃えるなどと云うことは滅多になかつた。

だが帰りには、よく誘い合つて食堂に寄つたものだった。一日の労働で空きつ腹を抱えて帰つても、寄宿舎の夕食の量は限られたものだったから、自然と食堂でうどんの一杯もすすつて急場を凌ぎ、何喰わぬ顔

で寄宿舎の飯をパクツクと云う寸法だった。

私達がよく足溜まりとしたのは、天虎屋という大衆食堂であった。

その親父は天井のタレ付けを自慢にしているだけあって、頗る味の良い井物を喰わせた。名前を虎吉か虎造とでも云ったのである。虎の一字を自慢の天井の天に組ませて、天虎屋の看板を出していた。

その店が今も残っているかどうかは皆目解らないが、その当時は中々繁盛していたようであった。

職場の坂本先輩と天虎の親父とは懇意にしていたので、お供をして行つてゐるうち、私達の仲間も、とうとうその店に集中して通うようになってしまったのだ。た。

いつも常連を組む六七人のうち、坂本先輩は二十七八歳で女房持ち、あとは寄宿舎から通勤している自称チヨンガー部隊であった。

仲間には母親が往年の怪力士出羽ヶ嶽のいとこだという五尺足らずの松田、ヘマばかりやらかして郵便局をクビになった鈴木、徴用逃れに就職した写真屋の次男坊玉田、姉の婚家先に下宿していたが義兄と喧嘩して飛び出し私の寄宿舎に駆け込んで来た佐々木等々、

口うるさい奴ばかりが顔を揃えていた。

そのうち坂本先輩は別格として、松田と鈴木が一番私と気が合った。

松田はひどい山形弁を昔から口真似されるのだが、別に怒るでもなく、何時もニコニコしている温厚さがあつたし、落ち着いてもいた。人より遅く入社して来ても、ガス計器などの操作を覚え込むのは早い方だった。

鈴木の方はまた松田の逆で、一日に一度は必ず仕事のヘマは叱られるのだが、根が明るい性格なものだから、剽軽な冗談を飛ばしては職場を湧かせた。

「鴉が鳴かぬ日があつても、貴様の叱られぬ日はないな」

と私が揶揄つても、照れ臭そうに頭を掻いて済ましていた。

私が入社した時は、熟練した工員は殆ど兵隊に行つた後だったので、細かい作業の指導も、直接野崎班長や坂本先輩から受ける事が出来た。しかし新工員が連続補充されて来るようになると、坂本先輩の組から離れ、私も四人の新工員を預けられて、習ったばかりの計器修理法などを教えることになった。

戦時中の人手不足からくる、間に合わせ主義は、こんな泥縄式教授すら怪しむとしなかったのだから、有り難い時世だったと云える。

四人の中には松田と鈴木が含まれていて、私のグループは何時も駑蕩たる風を巻き起こして、指示通りの作業を克服していった。

職場では班長に代わって作業の指揮に当たる坂本先輩は、若者達を掌握して置く必要があったのかも知れないが、よく面倒も見て呉れたし、天虎のノレンを潜る時も彼が先頭を切るのだった。

彼が夫婦きりで間借りをしている二階のその狭い部屋へ、私達を引つ張って行くことがあった。四つ年上だと云う彼の女房は、成る程先輩の姉のようにも老けて見える女だったが、私達がドヤドヤと押し掛けても嫌な顔もせず、その頃配給制度で乏しくなりかかった食糧を、惜気もなく出して喰わせる、氣つ風の好いところもあつたので、心易く押し掛けて行けた。

私一人だけが招ばれて行って、彼の晩酌の相手を勤めたことも二三度あつた。

その時などは、

「此奴は二度目の娘で、一緒になつてからまだ二年し

か経つてないんだよ」

などと氣分をほぐして、内輪話を聴かせて呉れるのだった。

坂本先輩は、何でも開けびろげに話す方なので、段々と解つたことであるが、彼は天虎に通つているうちに、その姉娘にのぼせてしまい、好意を寄せて貰いたいばかりに、高い天井ばかりを喰い続けたそうであるが、彼が切ない意中を打ち明けないうちに、娘は嫁に行つてしまった。わが愛する坂本先輩は失恋したのである。失望の極に達した彼は俄かに猛烈な空腹を覚え、天井を八杯も平らげたと云うのだから、恐れ入つた話である。

普通の人なら落胆して飯も喉を通らない。と云う処を、逆に腹が減つてくると云うのだから、確かに先輩は変わつてゐる。

彼が初めに貰つた女房は、どうしたことか彼が戦地に行つてる間に、男をつくつて逃げてしまつた。帰還して其の事を知つた彼は、またも天井のストレート。その時は七杯しか喰えなかつたそうである。

そんな先輩の悲観ぶりを見兼ねて天虎の親父が、後添いに世話して呉れたのが、現在の女房だと云うので

ある。

だから若者達を気軽に天虎に引き連れて行くのは、親父に対する好意に報ゆる意味もあったのかも知れない。が、他所者ばかりの私達には、先輩がそうした昵懇の關係を持つ店に、繁々と出入り出来るとう云うことは、有り難いことであつた。

何時の間にか、チヨンガー部隊變じて天虎組がつくられていた。

天虎組などと云うと、大向こうを身震いさせるような、物騒さを感じさせる名称だが、その実、同僚間の親睦を計るための懇親会に過ぎなかつた。その証拠には唯の一回も喧嘩沙汰などの問題を惹き起こしたことはなかつたし、口先ばかり達者でも、腕っ節の方は、からつきし駄目な奴ばかりで、喧嘩でもあろうものなら、真つ先に逃げ出すのを自慢にしている位なのだから、まったく世話のない連中の集まりであつた。

明治維新の神風連とか天誅組の奮起に、あやかるとい気分が無いではなかつたが、何と云つても、仲間が根城とする天虎屋の親父を喜ばせようとする、私の発案になる命名でもあつた。

さて天虎組をつくりはしたものの、工員の安い賃金

では、しじゅう天井ばかりを喰うと云う訳にはゆかない。大概はカケうどん一杯を、すすつて帰るのが関の山で、高い天井を運ばせるのは、ポケットが月給袋でふくらんだ晩位のものであつた。

この天虎組の規則では、その月の組長の番に当たつたものは、月給日の晩の天井の勘定を持つことにしていた。一度組長を勤め上げた者には顧問の資格を与える。顧問は組長が勘定全部を払う能力が無いとみたときは、その不足分を補う義務が生じると云うもの。

天虎組は簡単に云つてしまえば、月給を貰つた晩に、仲間同志で天井をおごり合うのでは、新米工員の負担が重過ぎることになるので、顧問制など拵えて、後輩をカバーしてやるようにしたのだつた。

最初の組長は坂本先輩で、その次が私だつた。仲間の中で就職順に就任するよう決めたためにそうなつたのだつたが、坂本先輩は七年も前から勤めているだけに、私とは段違いの給料を取っているせいだ、私を押し止めて藝口を開くのが常だつた。

街の近くの山々の雪もすっかり消えて、早春の暖かい夕霧がたちこめ始めた頃の天虎の店で、

「ヨクセイお前の井の盛りは、少し變たと思わないか」

「変だつて、どう？」

「感が鈍いな此奴は。よく見ろよほら」

坂本先輩が、私の箸を付けようとしている井と、板前の方と見比べながら囁いた。

「おいおい冗談じゃないぜ。皆のと少しも変わらないじゃないか」

「いやそうじゃないよ。どうも此の頃のお前の井を見ていると、ただ事じゃないぞ。登代ちゃんヨクセイに気があるんじゃないのか。なあ皆そう思わないかい」

「あやしいぞ！ヨクセイ。今夜はヨクセイを臨時組長にしようじゃないか」

「よしそれが好い。賛成！賛成！」

皆は面白がつて囁し立てた。

「先輩そんなことを言うと、松田に怒られるぜ。何にも知らねえんだな。松田はずうつと前から……」

「ヨクセイ、余計なことを言うなよ」

隅の方に腰掛けていた松田が、顔を赤らめて私を睨んだので、一座の関心と視線は却つて彼の方に集まつてしまつた。

仲間が私の事をヨクセイと呼ぶのは、私が会社の機関誌の文芸欄に、短歌や川柳等を投稿するとき使う、

「翠星」と云うペンネームを、そそつかしい鈴木が

「翼星」と読み違つてから、皆もそう呼ぶようになったので、療養所で川柳を作り始めたときつけて貰つたペンネームの翠星が、翼星と訛化して呼ばれても、私は働く仲間達からの愛称として、嬉しく受け取つていた。

天虎屋には、親父と登代ちゃんの二人しか居なかつたので客への配膳はもっぱら登代ちゃんの役だつた。

登代ちゃんは、まだ十七八の小娘だつたが、こうした客商売を地にして育つただけあつて、愛想の良い客あしらいぶりを見せて親しまれていた。

この可憐なマドンナとも云うべき登代ちゃんを、無視して居れるような天虎組の面々ではない。彼女への関心は何時か賑やかな話題を呈して尽くることがなかつた。

「登代ちゃん辛味が無いぜ、早く持つてきて呉れよ」

鈴木などは持ち前の悪戯つ気を出して、胡椒の小瓶をわざと隠して置いて、彼女が狼狽して持つて来たの

「何だこんなとこにあつた」

などと脇の方から取り出して彼女を怒らせて喜んだ

りした。

松田だけは、登代ちゃんのことと賑やかになる仲間とは別に、彼女の顔を見ると急に無口になつてしまうので、どうもおかしいと思つていたら、

「ヨクセイ。俺あ何だか登代ちゃんが好きになつてしまつたでばズ」

と或る時私にとつとう真顔で白状したのである。

「そんならしつかりしなくちゃ、お前も天井八杯の組になつてしまふぞ」

つい私も釣り込まれて激励したのだったが、彼のその淡い恋心も実ることとはならなかつた。

突然松田に招集令が来たのである。

「俺あ第二補充だからズ、大丈夫だべズ」

と本人も予期していになかつたし、誰が見たつて五尺にも届かない小男の彼に、よもや招集が来るなんて、考えてる者はなかつた。

さつそく坂本先輩の肝煎りで、天虎屋の奥座敷が借りられ、二間をぶち抜いたその会場に、班の全員が集まり彼の壮行会が催された。

天虎の親父が何処から手に入れてきたのか、配給以外は滅多に口にするこの出来ない酒や肴も充分に用

意された。然し誰の表情も重々しい気分浸されていた。今までに何度か職場の同僚を戦場に送り出すのに、こうした壮行会が持たれたが、今度程同僚たちの憐憫を誘つたことはなかつた。

野崎班長が、班の者を代表しての激励の辞のあと、正面に座らされていた松田が起立して、たどたと謝辞を述べた。

その姿を見ているうちに、私は涙が溢れてきて何うにもならなかつた。起立はしているが彼の背丈は、隣に座っている班長や坂本先輩の肩先より、幾らも高くないのだ。こんな小さな男を引つ張つて行つて、戦争の役に立つと云うのだろうか。

その頃南方の島で、いとこが戦死したことを、聴かされたばかりの私は、殊更戦争の無惨さを思つて、憤りに似た興奮で、その晩は自分を忘れて飲んだ。

「登代ちゃん松田にうんとお酌して遣れよ、今晚で最後だからな」

私は松田の仄かな恋の終わりを、美しいものに思ひ出させる為にも彼の傍近くに登代ちゃんを座らせて置きたかつた。

壮行会が終わつたら、雨が激しく降つていた。

松田と鈴木と私の三人は、したたかに酔ってしま
い、天虎から借りた一本の傘の下に肩を組み合いなが
ら、灯火管制で暗い通りを乱れて歩いた。

「ヨクセイ、登代ちゃんはお前にゆずって行くから
ズ、上手くやれよ。俺あ棄権したズ」

「馬鹿云え、松田二等兵が帰って来るまでは、ちゃん
あんを守ってやるから、心配しないで遣って来い」

そんなことを口走りながら歩いているうち、鈴木が
何かにつまずいた調子に、六七尺ほどもある深い下水
溝に三人とも一緒に、雪崩をうって転げ落ちてしまっ
た。

天虎の屋号の入った傘はポロポロに破れ、弁当箱の
包みは何処へ吹き飛んだか見当たらない。それだけな
ら好いのだが、ようようの事でコンクリートの溝壁を
這い上がってみると、三人共いずれ劣らぬ泥人形の上
に、汚水の中を這いずり廻ったものだから、ひどい悪
臭がする。

私達は、酔いも一時に覚めた思いで、こそこそと寄
宿舎に帰ると風呂場で汚れた体を洗い落として寝たの
であった。

手が痛くなる程何回となく固い握手を交わして、松

田を送って一ヶ月もしないうちに、私は急激な病変に
せきたてられて、彼を送った同じ駅頭から、こっそり
療養所へ向かう汽車に乗り込んだ。ホームには登代
ちゃん一人が見送って呉れていた。

再び帰ることがないと思つた私は、残っていた天虎
の勘定を払いに寄つたところ、登代ちゃんが狼狽して
弁当など拵えて、駅まで送って来て呉れたのだつた。

仲間の誰にも、病気の秘密を明かさず仕舞いで、ま
るで遁走でもするように、仲間達が勤務している時間
の汽車を選んで、任地を去ろうとした私だつたのに、
天虎の娘の見送りは、私を感激させて余りあつた。

筒袖の上衣にモンペと云う紺の標準服を着た登代
ちゃんの姿は、いつまでも私の網膜に残ることになつ
たが、それよりも天虎組の仲間達の誰彼の顔が、私の
追憶の臉をまたたかせるのである。

「甲田の裾」一九六一（昭和36）年3月号

小さな集まりを立ち上げて

好善社社員 藤井征子

市民学会を契機に文通が始まった木村龍一さんのすすめで、私が関わっている小さな集まりについて書きます。

東北震災後一年目の二〇一二年五月に、小さな集まりを立ち上げました。

以前から人にとつて、自分の居場所が必要では？と思いつけていましたが、やつと実現出来たのです。

横浜の小さな街の、地域ケアプラザという地域に開かれた場所でのスタートでした。

立ち上げた会の名称は、「フリースペースたんぼぼ」です。たんぼぼの綿毛が飛んで行き、誰かの胸にとどまってくれたら…そんな願いを込めました。

第一回目は、元同僚の保育士による『親子で楽しむ』という会でした。「フリースペースたんぼぼ」は、一つのテーマに絞らず、わくわくすることをやっ

て行こうという会です。今までに、ミニコンサート、うたごえひろば、介護福祉士や児童施設の所長の話を聞く会、朗読の会、手作りを楽しむ会、映画上映会など、さまざまな会を持ちました。毎回活動の後に、お茶とお菓子でおしゃべりするというスタイルは、はじめから変わっていません。

自由な居場所、たとえ一人の参加者でも、じっくりその人の話に耳を傾けよう、そんな会を目指しています。

ホームページは開設しない、SNSも使わない。あくまでアナログでーと、時代に逆行したあり方を、今も維持しています。毎回出すチラシは手書き、会終了後、次回の案内状を出しますが、それも手書きの手紙つきです。

人数は問わない。会を企画するスタッフ自身が楽し

みながらやっている。この二つがはじめからのポリシーです。

今年四月で満五年になり、五月からは六年目に入ります。これを機会に新しいことに挑戦していこうと考えています。

「放課後たんぽぽ」(仮称)という会。

子どもたちと放課後を共に過ごすという会です。

毎週一回開催出来れば、と現在地域ケアプラザや社会福祉協議会の職員と相談する段階で、まだ具体化してはいません。

今六人に一人の子どもが貧困世帯と言われている時代です。放課後、家に一人居るといふ子どもたちも多いと思います。

そういう子どもたちと友達になって共に過ごす。そういう会はずにありここに沢山あるでしょう。その一つにたんぽぽも参加したいのです。

この新しい挑戦が実現するかどうかは、まだ分かりません。

でもその小さな目標に向かって、心を合わせて歩いて行こうと模索しているところです。

(平成二十九年三月記)

落語をきこう会

たのしい話をきいて、大声で笑う。
心にゆとり元気に暮らそうぞすね。
ぜひいらしてください!

日時 2017 3月18日(土)
13:30~15:30

場所 豊川地域ケアプラザ
* 相鉄線 豊川駅 北口291号

会費 100円 (のりかき代付)

連絡先 (連絡先) 予約不要

フリースペース たんぽぽ

あなただけ居場所の時、
あなただけお茶を
おいしいおかしを
はくしませんか!
* 今月の予定表
5月20日(土) 映画上映
6月17日(土) わくわくカフェ
7月15日(土) 映画上映

わくわくカフェ

2017年になりました。新しい年 わくわく
とたくさん見つけてたいなさいですね!
今日は、メッセージをリクエスト。わたしの
メッセージ、みんなのメッセージ。

日時 2017 2月18日(土)
13:30~15:30

場所 豊川地域ケアプラザ
* 相鉄線 豊川駅 北口291号

会費 200円 * 会費 (お茶代100円)

連絡先 (連絡先) 予約不要

フリースペース たんぽぽ

あなただけ居場所の時、
あなただけお茶を
おいしいおかしを
はくしませんか!
今月の予定表
3月18日(土) 落語をきこう会
4月15日(土) わくわくカフェ
5月20日(土) 映画上映

創作のよろこび

木村龍一

冬期間の私のスケジュールは、畑にある作業小屋と展示場の屋根の雪下ろしや、通路の確保をすることです。

真冬のこの時期に、常設の作品を見るためにおいでになる方はほとんどいませんが、自分なりのこだわりと言つてもいい作業です。健康度を確認するための運動でもあります。

作業小屋と言つても隙間風と吹雪も入つて来る廃屋に近い状態で長い間使用して来た建物です。

道具や材料は少しずつ増えるし、手入れするスペースも必要となります。素人細工で小屋本体の手入れもすることで、粘土遊びに来る人、燻製作りに興味を示す人、山菜の下準備で来る人、お茶をする目的で集うこともありました。

何をするにしても、使い勝手が悪く、以前より改装は考えておりましたが、すでに二十年以上になつてい

るので、それなりに使えることで満足しておりました。築四十年以上になるこの建物は療友が食糧の乏しい頃に商売として食肉用として養豚する目的で自分で建てたようです。詳しい事情は別にして、その友人が畑をするために譲り受け、その方と親交があった私が使用することとなつたいきさつがあります。いろんな方が関わつたようですが、境界も数人と関わつていても、何一つ問題となることなく、園外でありながら隣り合っている便の良さ、静かな環境、遊び所として大変気に入っている次第です。

まさか二十年以上も楽しませてもらえらるとは考えておりませんでしたので、いい歳になつて改装することは二の足を踏む決断でしたが、健康状態も良く、創作への意欲が衰えていないことが決め手となりました。

この小屋、もともと部屋らしき構造もありますが、部屋の真ん中に柱がある使い勝手の悪い状況を何とか

しなくてはなりません。

その前に床の下、基礎、建て付けと点検する必要があります。ゆがみも少なく、基礎がしっかりしています。柱が細いのが気になりますが、真柱を背負わせることで何とか行けそうです。

再利用できるものはほとんどありませんが、あるものをなるべく使うこととし、なるべく出費を抑えるには、一人でやるしかありません。

おおまかな材料費として一部屋分、約八帖の内側に断熱材を入れ、大壁作りで仕上げようとすものです。意外にもスナリと大蔵省がOKを出してくれました。これから雪の季節に入る昨年十一月、作業はスタートしたのでした。もうひとつの課題として、サッシ二組分をなんとか利用したいとの思いもあります。建て柱を二本抜くことなので、かなり慎重にその場所を決めなくてはいいけません。

その前にやるべきことは、園内の友人からいただいた和筆筒や茶筆筒で仕切りや棚となっていたものを解体することです。その廃材の処理も同時進行しなくてはいけません。ドラム缶で作った焼却炉が威力を発揮してくれました。その筋には内緒の所行であることなの

で少しずつ壊しては処分する作業がしばらく続きます。

何はともあれ電気を通す必要があります。別棟の展示場には一度電気を使ったことがあり配線されていますので再度通電の手続きをします。母屋となるこの小屋には電気配線はないので、ドラム式の延長コードの出番です。二台の暖房機を確保することができましたが、当分は役に立つことはないでしょう。

材料を発注しましたが、十日ほどしないと揃わない。年内は無理。解体と焼却、少しでも材料置き場を広くすることに作業を集中することにしました。大きな嬉しい誤算もありました。雪が少ないこともあり、サッシが二ヶ所にピタリと収まったことです。

寝正月どころではなくなりました。トラック一台分の材料が届きました。建設現場の近くに車庫があり、そこを片付ける仕事も加わりました。大半の荷物を処分するしか方法はありません。不要品の山も、このよ

うな事情でもないかと決断は出来ない性分なのです。予想外の展開のようでも、確実に作業は進んでいます。分厚い発泡スチロールの断熱材が床や側面に取り付けられてゆき、多少ストーブの効果が出て来たように感じます。

やり直しも加わり、出入り口がまだ決まっています。何しろ図面などないので、昨日と今日の予定が変わることは日常茶飯事なのです。大蔵省の視察がある状況に変更もあります。余り気にしないのが俺流でもありますし、参考になる部分もありますので、ほどの対応というところで。

平屋ながら天井裏の活用の為に階段式の梯子も完成しました。古い建物なので補強することを重視していて、特に部屋の中央にある柱を外すには、その分を支える対応が悩みの種です。真下に角ものを背負わせ、両側から剥き出しの筋交いをする解決法にすることにしました。充分であるかどうかは、屋根に積もる雪で決まることでしょう。

自分の感ピーターに頼るしかない。ひとつひとつの工程は写真に納めつつ、少しずついい雰囲気になって来ます。最終仕上げをクロスではなく、カラーベニヤにすることになるので仕上がりは悪いが、カーテンでポロ隠しの計画は出来て見ないと分からないことになっていきます。

それにしても、最近のホームセンターは品揃えが多く、材料ひとつ、カンナを使う必要のないものが揃っ

ていて素人細工する人にはありがたい限りです。側面全部を棚とする計画なので剥き出しになる材料をそのまま仕上がりとして使えることは、はかどることに繋がります。

二月に入ると電気の工事も同時進行で始まりまして。大きな声では言えませんが、ホームセンターで全部用意できました。

換気扇は両側に取り付けました。たぶん夏場にその威力を発揮するはずです。天井の内側もサンを打ち、白い化粧ベニヤを貼ると一段と明るく感じる。ストープの威力も確実なものとなり、仕上がったばかりの棚に書籍、装飾の置物、もちろん「やきもの作品」も置いてみる。カーテンも取り付け、状況を確認してみます。

二台の蛍光灯も大型です。間接照明はもちろん手造りの灯籠の一番となります。テレビに関わることはアテナの問題があるので、DVDが多くなるでしょう。古いレコードを再生する機会も多くなりそうです。

生活をする場所ではないので、水廻りの工事は計画に入っておりませんが、流し台は取り付けましたので、簡単な飲食は出来るはずです。

ガス・水道・風呂はなくても別棟にはトイレもあるし、三月に入る頃には八分通りの完成の段階まで来ました。天井裏もコンパネを敷くことで荷物を置くことが出来るようになりましたが、建物としてのバランスがどのようになるのか、全く計算出来ないのが怖いのですが、なるようにしかありません。余計な心配はしないことにしています。

残っている材料と新規の見積もりとして、部屋の中にはジュータンやカーテンの作業がありますが、出入り口の外側や屋外からの玄関はサッシにしたい、出来ればハンモックを配りたいのですが、決定とはなっていないです。外壁等の付帯工事、サッシ廻りと換気扇、南北のヒサシの手直しも必要となり、雪が無くなつてからの作業となります。

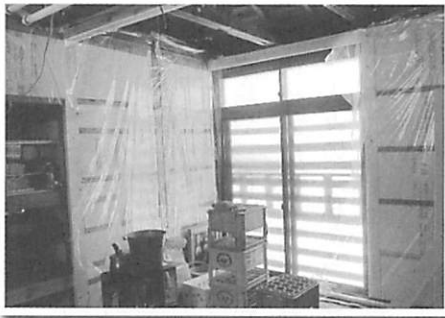
遊び場としての畑、物置小屋が部屋として利用できますが、特別に目的がある訳ではありません。

遊び場としてプラスチックアルファアの期待がありますが、作業台もなく、粘土をいじめることはできないでしょう。木工製品なら道具もあるし、新しい切り口が見えるのかも知れません。

個々の活動ながら、縁があれば役に立つこともある

でしょう。出来ることを積み重ねること。何とか次につながるポケットになるよう願うだけです。

(二十九年春)



ビフォー…



アフター

語り継がれた偏見と差別

歴史のなかのハンセン病

福西征子著

差別する心の恐ろしさ

大橋 由香子

圧倒される一冊だ。著者は、複数の国立ハンセン病療養所に勤務し所長も務めた医師。

「ある日突然、冷たく患者を見据えていることに慄然（りつぜん）」と「した経験から、「差別と偏見の由来を知らずしては、その根を断つどころか議論するとさえ難しい」と、歴史をさかのぼっていく。

著者は古代仏教の経典を読み終わった瞬間、明治時代にハンセン病予防法に関係した福澤諭吉や北里柴三郎、光田健輔もこれを読んだに違いない、と思つたという。奈良時代から「宿罪のゆえに治癒しがたい」「不信心の報い」とされ、あの一休さんも、病者への

同情はなく「生き腐れ」と断罪している。

幼いころ、著者の故郷・福島県会津で祖母が語ってくれた石堂丸や山椒大夫の物語でも、ハンセン病が「神罰仏罰の病、家人に受け継がれる病」として描かれていた。しかし、新徳丸など美しい名が患者につけられ、苦しみや再生も語られていることに著者は興味を抱く。

江戸時代の会津藩や三春藩、加賀藩の記録からは、「非人」とされ差別にさらされる姿が見えてくる。

こうして培われた差別と偏見が明治政府の富国強兵、殖産興業政策の下で再生産され、「らい予防法」ができていく。遺伝説と伝染病説が絡み合う帝国議会での議論や、森鷗外など知識人の言説は、1996年までの療養所の日常につながっていた。抑圧制度を支える、人々の（私たちの）差別する心の恐ろしさ。著者の前著『ハンセン病療養所に生きた女たち』（昭和堂刊）と共に、手に取ってほしい。

（A5判・338頁・価6000円＋税 昭和堂発行）

（平成29年8月16日 社会新報より引用）

福西征子（ふくにし ゆきこ）

1945年 福島県会津生まれ。

1969年 福島県立医科大学医学部卒業。

1980年 京都大学医学博士。

京都大学小児科および皮膚病特別研究施設を経て、

1978年から大島青松園、国立駿河療養所、多磨全生園などの国立ハンセン病療養所勤務。

1992年国立療養所松丘保養園副園長、1994年同園長、2013年同名誉園長。

1999年以降は、松丘保養園長として勤務する傍ら、西アフリカ諸国に蔓延する顧みられない熱帯病・ブルéri潰瘍のフィールドワークに関わった。

著書に

『ハンセン病療養所に生きた女たち』

（昭和堂、2016年）

日本書紀にハンセン病はど
う描かれていたか。一休和
尚はどう語っていたか。幕
藩体制下の諸藩はどんな対
策をしていたか。

古代から明治まで文献に記
されたハンセン病を洗い出
し、いかに人々のなかに偏
見と差別意識が根づいて
いったかを検証する。



思い出食堂

治療棟看護師 須藤 真央子

第五回思い出食堂は二月八日に開店しました。立春が過ぎててもなお寒い日が続く青森。春まだ遠く、体調を崩しやすい季節です。

最近健康維持のために甘酒を飲んでいる方が多いようです。甘酒はその効果から「飲む点滴」とも言われています。甘酒は手作りできることをご存じですか？入所者の中にも甘酒を手作りされている方がいらつしやるとのこと。そこで、今回は甘酒作りに挑戦し、一緒に大根のビール漬けとがっぱ餅も作りました。

甘酒とビール漬けは出来上がるまで二週間ほどかかるため、一月二十五日から作り始めました。甘酒の材料はとてシンプルで、もち米と麴と水です。もち米一升を蒸し器で蒸かし、冷ました米に麴を混ぜます。それからひたひたになるくらいの水を入れて温めます。甘酒は温度管理が肝心で、少し熱いと感じる程度の

六十度位まで温めます。温め過ぎると麴菌が死んでしまうので、慎重に火を入れます。甘酒は発酵させることが必要です。三〜四回温め直して、甘みが出てくるのを待ちます。その後一週間〜十日ほどで飲み頃になります。

ビール漬けは当初五キロの大根を漬ける予定でしたが、大根は多めに準備していました。ここで「大根全部漬けるか？」この量だば、ざらめの量は？ビールは？」とその場で調整を始めました。レシピ通りにはか作れない私たちの戸惑いをよそに、どんどん漬物作りは進んでいきます。大根の皮をむき、四つ切りにして樽の中に並べて、ざらめ、酢、鬼辛子、ビールを入れます。鬼辛子は水で溶いて、練っておきます。しかし、ここでアクシデント発生。辛子をいくら練ってもツーンとした辛みが出てきません。「おかしい、辛み

がこない。この辛子、違うんでねが？」との声が上がりました。私たちが準備したのはきゅうり漬け用の辛子だったので。これでは大根を漬けることができません。漬物をつけたことがない私たちには辛子の違いがわからなかったのです。どうしたものかと途方に暮れていると、田沢忠さんが「家にある」と一言、自宅から辛子を持ってきてくれました。

「樽を回す」「水が上がる」「ストを打つ」など初めて聞く言葉もあり、おいしく作るためのコツを一つ一つ教えてもらいながら、笑いの絶えない楽しい甘酒・漬物づくりとなりました。

二月七日にはがっぱら餅を二時間かけて十五枚焼きました。今回は坪田タヨさんが初めて参加し、卵を割って生地を混ぜ、焼きあがったお餅を切り分けてくれました。坪田さんがお餅を同じ大きさになる



慎重に切り分ける坪田タヨさん

ように丁寧に揃えて切っているのを見て、その場にあった職員全員が「さすが！」と感心していました。思い出食堂は二月八日午前九時にオープンし、入所者と職員合わせて五十六名が参加しました。当日は田沢忠さんがウェイターとして手伝ってくれました。もはや田沢さんは「思い出食堂店長」です。手慣れた様子で次々と運び、接客もお見事です。

甘酒は「甘い」という人もいれば、「もつと味が濃い方がいい」という人もいました。好みが分かったのですが、甘酒作りを覚えてくれた先生からは、「いい甘酒だ！」と合格点をもらいました。がっぱら餅は一見すると卵焼きですが、食べるとほんのり甘くてくるみが入り、パンケーキみたいだという感想も聞かれました。くるみがアクセントになり、おいしいと好評でした。みなさんに話を聞くと、これまで一度はがっぱら餅を作ったことがある方が多いようです。「昔は昼食のかわりにみんなで焼いて食べた」という話も聞かれました。それぞれにうれしいレシピをお持ちのようです。「ビール漬けもおいしくできました」「誰が漬けたの?」「どうやって漬けたの?」などの質問に田沢さんは、「みんなで漬けて、ビールはオレが飲んだ!」と答え、

笑いを誘っていました。

今回、初めて思い出食堂を担当し、上手くいくかどうか不安でしたが、みなさんの協力のおかげでおいしく楽しい時間を過ごすことができました。いろんな方から「漬物大丈夫か?」「甘酒上手くできたか?」と声を掛けてもらい、とてもうれしく思いました。甘酒のやさしい甘さがみなさんのやさしさや心遣いに思え、私の思い出の味となりました。思い出食堂と一緒に作る楽しさを感じ、それぞれの知恵やコツを教えてもらえる貴重な場です。ぜひみなさんも参加してみませんか?次はどんな思い出の味に出会えるのか、楽しみです。



がっばら餅と言えば田沢さん!



完成!



ごちそうさまでした!

春の思い出食堂

看護助手 横濱 明美

四月五日に今年度最初の思い出食堂が開催されました。私は思い出食堂に参加した事が無かったので、今回参加出来る事が嬉しくて、「どんな料理を作るのだろうか？いろんな会話をしたいな。」と、とてもワクワクしていました。

今回のメニューはおはぎ&道明寺セットです。前回、甘酒作りで使用した餅米が残っていたので、入所者さんと話し合い今回は、おはぎを作ろうという事になったそうです。

前日の四日から準備開始です。会場の多目的和室入り口に手作りの暖簾をさげ、会場には以前に行っていた思い出食堂の様子のパネルを展示しました。いつもテーブルには飾りが無く寂しいということで、今回はテーブルに季節感を出す桜のシールを貼ることにしました。準備をしているうちに、「テーブルに花



いていたのを見かけ、貴重な花を頂き花器に飾る事にしました。

調理は文化センターで行い、午後の調理に合わせ、午前中に餅米を研ぎセットします。センターから

を飾りたいね」「ふきのとうなんてどう？」という意見で盛り上がり、保養園内を散策し、バツケ（ふきのとう）を飾ることにしました。この時期咲いている花は余り無いのですが、入所者さんの花壇に福寿草がとても綺麗に咲

一・五升炊きの炊飯器二台と二升炊きを一台借りてきました。普段研ぐ事の無い量の餅米を研ぎ、炊飯器にそれぞれセットしました。水加減は、ベテラン主婦のスタッフに見て貰いスイッチオンです。

午後、餅米が炊きあがった頃に皆文化センターに再び集合しました。しばらくすると、一緒に調理をしてくれる入所者の方々が来てくれました。昼の間にブルーシートを広げ、おはぎ作りの準備万端です。

「まず、餅米を半殺しにして。」半殺し？半殺しの表現に思わずビックリし、どうやって半殺しにするのか興味津々でした。早速、田沢忠さんが摺り子木を手にとると慣れた調子で餅米をつぶし始めました。簡単そうに見えたので、やってみたいと交代を願いました。が、実際にやってみると、意外と力を使うので何度かこねているうちに腕が痛くなつてしまいました。最後の仕上げはやはり田沢忠さんをお願いして餅米の半殺しが出来上がりました。これで下準備完了です。

最初にゴマおはぎを作りました。このおはぎは、三浦喜美子さんの思い出の料理で、幼少期に家で餅米もゴマも植えていたからよく作って食べていた事

を話してくれました。ゴマと調味料の調合は勿論、三浦喜美子さんにお願いしました。どんな味がするのだろうと、作る前から楽しみます。皆でブルーシート上に円陣をくんで座り、餅米を丸める人、受け取りゴマをまぶす人、出来上がりをケースに入れる人と、自然に役割が分担され流れ作業が始まりました。スタッフ全員、初めは慣れない手つきでしたが三個四個と丸めているうちに手慣れてあつたという間にゴマおはぎ用の餅米は無くなっていました。続いて、道明寺を作ります。ピンク色に餅米を染めるのには、砂糖湯に食紅を溶かし混ぜます。これが中々思った色に染まらずに何度も何度も食紅を足してようやく道明寺色になりました。中に入れるあんこは既製品の物を使用しました。そして餅をくるむ桜の葉は、和菓子屋から買いました。

再び円陣を組み、坂本さんが餅米を取り分けてくれました。それを浜野あや子さんと私達が丸めます。途中で、「あんこも誰か丸めない」と、中に入れられないじゃない」と坂本さんの号令で「そうだそうだ」と、急いであんこを丸め始めました。私は、高校時代に団子屋でアルバイトをした経験があるので、餅



もち米を形よく丸める浜野さん。

もち米を取り分ける坂本さん。

ゴマをたっぷりまぶす三浦さん。

ケースに入れ、トレイに並べる田沢さん。

米であんこをくるむのが楽しくてどんどん出来上がりました。他のスタッフもどんどん出来上がるので餅米を取り分ける坂本さんは「皆早くて追いつかないよ」と苦笑いをする場面もあり、終始和やかムードでした。あんこの入ったピンクの餅米を桜の葉で覆うと、まるで売り物の様な出来映えに「自分で作った割に出来たあ。」とか、「これなら店出せるよ」など自画自賛の会話が飛び交いました。

最後の一品は、きなこおはぎです。これは、浜野あや子さんの思い出の料理で旦那さんの実家で初めて食べた時に、こんなもあるんだあとビックリしたそうです。「田舎のおはぎはあんこがいっぱいついて草履みたいに大きかったんだよ」と作りながら話してくれました。三品目となると皆、要領が良くなり黙々と作業が進みます。私達が作っている横で田澤忠さんが、出来上がったおはぎを一個ずつカップにつめて綺麗にトレイに並べてくれました。全ての作業を終えて翌日の事を思うと、来てくれる入所者は、どんな表情で食べてくれるのだろうかという期待でいっぱいでした。

思い出食堂当日は、九時のオープンを待ちわびて

いたように直ぐに来客がありました。おはぎセット、桜茶をお盆に乗せて慎重に運びます。「おー。これみんな作ったの？凄いいね。」嬉しくて思わずニヤけてしまいました。が、ゆっくり話す間もなく、お客さんがどんどん来てくれて嬉しい悲鳴です。事前に申し込みを受けていた以外にも飛び入り参加があり大盛況でした。職員だけでは手が足りず、田沢忠さんと坂本さんが見かねてウエイターを手伝ってくれました。田沢忠さんのエプロン姿はまるでお店のマスターの様でした。

入所者さんからは、「工藤パンのおはぎより美味しい」とか、「道明寺は買ったんだべ」「観桜会で売ればいい」などとても嬉しい言葉を頂きました。前日、調理を手伝ってくれた三浦喜美子さん、浜野あや子さんも来てくれました。また今回は、平成二十七年に回想法の指導して頂いた野村禮子先生もいらしてくれました。入所者さんと久し振りの再会で会話を楽しみながらおはぎを食べ、道明寺は「売り物でしょ」と、驚かれています。

今回初めて参加して、おはぎ一つにも一人一人それぞれの思い出があり、懐かしい物を作り味わう事

でその頃の記憶が蘇り、それが喜びに繋がるのはとても素敵なことだと思えました。

次回の思い出食堂も楽しみます。



ごちそうさまでした！

どうぞよろしく願います

二十八年七月から当園で働く16名です。(順不同)

(平成二十九年十月一日現在)

①勤務場所

②あなたの宝物は何ですか？

③一言挨拶



藤田 純子(ふじたじゅんこ)

①中央センター2階 看護助手

②友

③入所者の皆様が笑顔で心地よく過ごすことができ
るように、皆様の日々の生活に寄り添い、お手伝い
をさせていたただきたいと思っております。



西田 智子(にしだともこ)

①中央センター2階 看護助手

②猫達

③入所者様、先輩職員の方々に日々ご指導を頂きな
がら一生懸命頑張つていきたいと思ひます。よろし
く願ひいたします。



三浦 康世(みうらやすよ)

①2センター 看護助手

②子供達(三人)

③平成二十五年七月より会計、二十六年六月より福
祉室、同年十月より盲人会、そして本年十月より2
センター配属となりました。入所者の方々がよりよ
い日々を過ごせるように努めてまいります。



清野 千菜（せいのちな）
① 中央センター1階 看護助手

② 3匹の飼い犬

③ 昨年十一月より採用となりました。業務の他、保育園の歴史を入所者様や先輩方に教えて頂き勉強になります。今後も、沢山の事を学んでいきたいと思
います。



藤田 鈴果（ふじた れいか）
① 病棟 看護師

② ペット（犬一匹 豆柴）

③ 「一人一人寄り添う看護」をモットーに日々の看護に当たりたいと思います。ご迷惑をお掛けするかと思います。よろしくお願いします。



大橋 愛夢（おおはしえむ）
① 病棟 看護助手

② 愛犬

③ 十二月より看護助手として病棟に勤務している大橋です。先輩方からご指導頂きながら、入所者様に安心してもらえる様な関わりを心掛けて頑張ります。



藤田 優子（ふじたゆうこ）
① 中央センター1階 看護助手

② 子供

③ 四月より看護助手で採用になりました藤田優子です。入所者の皆様が安心して生活できるように一日も早く仕事を覚えて頑張りたいと思います。



鎌田 明那（かまたはるな）
①福祉室 医療社会事業専門員

②家族

③みなさんとお話ししながら、たくさんのことを覚えていきたいと思っています。一緒に過ごす中で役に立てることがあれば嬉しいです。よろしく願います。



山内 舞子（やまうちまいこ）
①会計 事務補助

②父から貰ったネックレス

③皆さんはじめまして。園内の場所も仕事もまだ分からない事ばかりでご迷惑をおかけしていますが宜しくお願いします。気軽に声をかけてください。



斉藤 寛子（さいとうひろこ）
①リハビリ 理学療法士

②子供

③わからないことも多いと思いますが、皆さんに色々とお聞きしながら、リハビリを提供していきたいと思えます。どうぞ宜しくお願い致します。



初田 大介（はつただいすけ）
①研究検査科

②カメラ

③北海道から来ました。心電図の検査などで入所者様とお目にかかる事があると思います。日々勉強して頑張りたいと思います。よろしく願います。



上原 めぐみ(うえはら めぐみ)
①病棟 看護師

②2年前から飼っているフクロモモンガが一番大切な存在です。

③29年7月から採用となりました。入所者の皆様との一日一日の関わりを大切にし、より良い看護を提供できるように、頑張りたいと思います。



漆館 信貴(うるしだて のぶよし)
①中央センター2階 看護師

②高校生の時に買ったエレキギター

③29年8月より勤務している漆館と申します。

覚えが悪く皆様にはご迷惑をお掛けする事も多いかと思いますが、精一杯頑張りますので宜しくお願いいたします。



太田 洋美(おおた ひろみ)
①病棟 看護師

②家族

③29年5月から病棟へ配属となりました。分からないことも多く、皆様にはご迷惑をかけないように頑張ります。入所者の皆様、今後ともよろしくお願ひします。



木立 有紀(きだち ゆうき)
①病棟 看護師

②子供

③29年6月から病棟に配属になりました木立です。

先輩職員から沢山の事を学び、入所者様に安心して頂けるよう、笑顔を忘れずに看護できるように頑張ります。



平山 富美子(ひらやま ふみこ)

①病棟 看護師

②家族

③日々、入所者様から多くのことを学ばせていただいています。入所者様がここでケアを受けて良かったと思えるような看護をできるよう頑張ります。

人事異動①

【退職】(平成29年3月31日付)

事務長 菅 政彦

自動車運転手 中村 誠一

介護長 中村 小幸

(以上 定年退職)

(辞職)

看護師 小山内覚志

事務補助 矢内 朱音

看護助手 渡邊 時子

看護助手 齊藤 浩子

(以上 任期満了)

【転出】(平成29年4月1日付)

薬剤科長 保田 栄一(八雲病院薬剤科長へ出向)

事務長補佐 三橋 守人(宮城病院専門職へ出向)

臨床検査技師 渡邊 晴香

(弘前病院臨床検査技師へ出向)

【転入】(平成29年4月1日付)

事務長 大間 透(函館病院企画課長より昇任)

薬剤科長 大塚 誠二

(盛岡病院副薬剤科長より昇任)

事務長補佐 岩渕 明浩

臨床検査技師 初田 大介(八戸病院業務班長より転任)

(北海道医療センター血清主任より転任)

【再任用】(平成29年4月1日付)

自動車運転手 中村 誠一

【昇任】(平成29年4月1日付)

介護長 倉内 亮(副介護長より)

副介護長 藤田 淳子(看護助手より)

人事異動②

【採用】（平成29年4月1日付）

《定員内職員》

看護助手 浅田 卓也（賃金職員より）

看護師 藤田 鈴果（病棟勤務）

医療社会事業専門員 鎌田 明那（福祉室勤務）

《期間業務職員》

看護助手 藤田 優子（中央センター1階勤務）

《パート職員》

事務補助 山内 舞子（会計勤務）

【転入】（平成29年4月1日付）

理学療法士 斉藤 寛子（あきた病院より）

【採用】（平成29年5月1日付）

《定員内職員》

看護師 太田 洋美（病棟勤務）

【退職】（平成29年5月31日付）

看護助手 工藤 亮子

【採用】（平成29年6月1日付）

看護師 平山富美子（病棟勤務）

看護師 木立 有紀（病棟勤務）

【退職】（平成29年6月30日付）

外科医師 木村 俊郎

（弘前大学医学部附属病院へ）

看護師長 阿部 恵子

看護師 工藤しずえ

看護助手 黒田 貴子

【採用】（平成29年7月1日付）

外科医師 谷地 孝文

（弘前大学医学部附属病院から）

看護師 上原めぐみ（病棟勤務）

【採用】平成29年8月1日付

看護師 漆館 信貴（中央センター2階勤務）

自治会日誌

二月中

- 1日 2/1付採用職員1名 挨拶に来訪
- 2日 企画運営委員会
- 3日 入所者説明会「一般寮内線電話設置について」
- 7日 真宗大谷派北海道教区6名来園、石川会長が講演
- 8日 第3回松桜コンサート「3年5組おでかけコンサート」新城中学校3年生38名による合唱
- 9日 行事実行部会
- " 入所者説明会「社会交流会館等について」
- 10日 第5回執行委員会
- 11日 青森県ハンセン病パネル展（於・青森市サンロード青森）
- 14日 真宗大谷派 本田氏来訪
- 16日 施設整備委員会（石川会長）
- 22日 秋田県ふるさと芸能慰問「小野花子民謡ショー」
- 23日 四天王寺大学 田原範子教授、和田謙一郎教授来訪
- " 倫理委員会（石川会長）
- " 観桜会専門部会

三月中

- 23日 男九〇歳逝去 青森県出身
- 24日 第6回執行委員会
- 28日 男八十六歳逝去 青森県出身
- 3日 平成28年度国費予算説明
- " 入所者説明会「社会交流会館について・松桜会計報告について」
- " 新春トランプ大会（多目的和室）
- " ヒューマンライツふくおか理事 藏座江美氏来訪（9日）
- 4日 松丘保養園の将来構想をすすめる会第9回総会
- 8日 第7回執行委員会
- " 観桜会専門部会
- 16日 東谷商店との売店契約
- 17日 歌つこ広場
- " 第8回執行委員会
- 23日 入所者説明会「社会交流会館外構工事について」
- 27日 離任式
- " 入所者説明会「居室移動について」
- 29日 観桜会専門部会
- 30日 3/31付退職職員1名 挨拶に来訪

四月中

3日 4/1付採用・転入職員 挨拶に来訪

6日 企画運営委員会

〃 行事実行部会

7日 第9回執行委員会

9日 「真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会」

が松丘会館に於いて開かれ、石川会長がシンポジストとして出席

10日 真宗大谷派6名来訪、執行委員と懇談

14日 第10回執行委員会

19日 観桜会専門部会

20日 桜の植樹と園内散策

21日 女八十一歳逝去 青森県出身

24日 第4四半期自治会会計業務監査（〜25日）

〃 ヒューマンライツふくおか理事 蔵座江美氏来訪

25日 支部代表者会議及び厚労省支部単独陳情の為、

石川会長出張（〜28日帰園）

26日 落語家 桂福丸さん 外1名来訪

27日 平成29年度観桜会（落語家 桂福丸さんの独演会）

五月中

1日 5/1付採用職員 挨拶に来訪

8日 観桜会専門部会（反省会）

9日 環境整備委員会（佐藤副会長）

12日 第11回執行委員会

17日 一般寮交流会（八甲田ロープウェイ・萱野茶屋）

18日 重監房資料館 柏木学芸員来訪

19日 歌つこ広場

〃 第12回執行委員会

23日 入所者説明会「社会交流会館外構整備について」

25日 第33回（平成29年度）歌謡交流大会

26日 頼澤君建築事務所（台湾）宗田昌人氏来訪

〃 F I W C 関西委員会 五十嵐氏来訪

29日 枝豆植え（浪岡農家福土さん来園）

31日 青森市福祉部 能代谷部長 外2名来訪（全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会について）

六月中

1日 一般寮との話し合い

〃 6/1付採用職員2名 挨拶に来訪

〃 企画運営委員会

〃 第20回春季親善交流ゲートボール大会

3日 青森ロータリークラブとの植樹

5日 中央センター一階との話し合い

5日	平成30年度予算要求統一行動の為 石川会長出張(7日帰園)	23日	納涼祭実行部会
6日	中央センター二階との話し合い	29日	6/30付退職職員1名 挨拶に来訪
7日	2センターとの話し合い	30日	倫理委員会(会長出席)
"	思い出食堂	七月中	
8日	1センターとの話し合い	3日	7/1付採用職員 挨拶に来訪
"	行事実行部会	"	納涼祭実行部会
12日	環境整備委員会(副会長出席)	4日	松前地区部会人権擁護委員12名来園 石川会長が講演
14日	一般寮・教会関係ストープ取り外し	5日	青森市福祉部障がい者支援課 土岐課長来訪
16日	第13回執行委員会	6日	不自由者棟入居者慰安(七夕祭)
"	納涼祭実行部会	7日	平成29年度全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会一行来園(献花、施設見学、懇談会)
19日	ハンセン病パネル展(青森県庁北棟) 23日	"	NHK細川記者来訪
"	曹洞宗 寺田氏来訪	11日	青森市福祉部 能代谷部長 外2名来訪
20日	第14回執行委員会	"	納涼祭実行部会
"	全医労東北地方協議会 千葉副議長 外2名松丘支部2名来訪	12日	青森管内裁判官・幹部職員 見学研修の為来園(一回目) 石川会長が講演
21日	「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典へ出席の為 石川会長出張(23日帰園)	18日	岩手県慰問
22日	らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日	"	青森管内裁判官・幹部職員 見学研修の為来園(二回目) 石川会長が講演
"	平成29年度高齢者慰安バスレク(大鰐町「鰐力」)	20日	横手市増田民生児童委員協議会視察研修
△		21日	第15回執行委員会

24日 第1四半期自治会会計業務監査（25日）
27日 視覚障害者の会災害福祉避難所見学

” 第35回（平成29年度）納涼祭

八月中

1日 8/1付採用職員1名 挨拶に来訪

2日 ヒューマンライツふくおか理事 藏座江美氏来訪（9日）

3日 企画運営委員会

” 県の招待により青森ねぶた祭を観覧

4日 ういむい未来の里視察研修

” 第16回執行委員会

” 好善社代表理事（三吉信彦氏来訪（執行委員と懇談）

7日 松丘聖ミカエル教会墓参

9日 秋田県健康推進課来園

” カトリック教会墓参

14日 女八十八歳逝去 秋田県出身

18日 第17回執行委員会

” 青森県社会保障推進協議会事務局 工藤詔隆氏来訪（「中央社会保障学校in青森」について）

21日 真宗大谷派本間氏来訪（白道会報恩講について）

25日 自治会選挙管理委員打ち合わせ

25日 ハート相談センター相談員磐井静江氏、村上義隆氏、青森県社会福祉士会田中志子来訪（石川会長と懇談）

” 歌つこ広場

26日 秋田県里帰り事業（第91回全国花火競技大会…大曲の花火大会等）（27日）

28日 敬老会実行部会

29日 行事実行部会（松風塾高校慰問、納涼祭反省会）

31日 入所者説明会（介護員の三交代制について）

” 北海道知事訪問

編集後記

平素より、私ども自治会活動発展のため、深いご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。また、小誌「甲田の裾」が、諸般の事情のため当初の予定より大幅に遅れてしまい、皆様にこ心配とご迷惑を掛けましたことをお詫び申し上げます。機関誌を発行することは各療養所同様、当園も段々難しくなってきました。今一度、機関誌の在り方を見直す時期になっているのかも知れません。しかし、例え少ない頁数でも定期的に情報を発信することが機関誌の役割かも知れないと思っております。今号は、2号・3号の合併号となりますことをお許しください。

（佐藤 勝）

園内の出来事

平成29年 観桜会 (4月27日)



小野寺新青森市長が初来園。松丘の桜とラーメンを堪能されました。



桂福丸さんの独演会も恒例となり、観桜会には欠かせなくなりました。

第35回 納涼祭 (7月27日)



いつもは閑散としている渡り廊下が色とりどりの出店で溢れ、子供達の歓声が響き渡りました。



この日のために喉を鍛えた90歳の川上ふみさん、「柔」を熱唱。

敬老会 (9月14日)



さくら保育園の園児たちによるお遊戯は敬老会には最高のプレゼントです。



各センター職員による「お祝いビデオレター」で抱腹絶倒！

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で108年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園 長 川 西 健 登

保有敷地 二二〇、五四八平方メートル
(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方メートル
(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方メートル
(一〇、九二〇坪)

交 通 案 内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行き
 2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き
- 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内公園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

一般財団法人 松丘保養園松桜会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川 西 健 登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775) 一四三一―番